

「青ヶ島の“タビゴヤ”と出産 — 出産介助者の役割とは何か —」

津田塾大学大学院国際関係学研究所  
後期博士課程 松本亜紀

論文要旨

本論文は、日本において出産の医療化・施設化への移行がもっとも遅かった地域のひとつである東京都青ヶ島村を対象とし、従来の先行研究において看過されがちであった、近代西洋医学に基づく出産介助を前提としない出産のあり方に着目しながら、青ヶ島の事例の検討を通じて、出産介助者が「産婦と児に触れない」出産介助のあり方を可能にしていた社会背景と、そのような出産を支えた出産介助者の役割を明らかにしたものである。

ここで取り上げる事例は、平成 18（2006）年 11 月～平成 27（2015）年 10 月にかけて継続的に実施した東京都青ヶ島村でのフィールドワークによって得られたデータに基づいている。文献資料とともに、医療化以前の出産および出産介助を経験した女性 15 名への聞き書き調査を活用したのが、本論文の特徴である。

「序章 研究背景」では、本研究の調査地である青ヶ島で筆者が聞いた「女はひとりで子供を産む」という話から得た問いに基づいて、本論文における問題関心を提示した。また、絶海の孤島という地理環境にあって、結果的に近代医療の流入と受容が島民に長く阻まれてきたこと、タビゴヤと呼ばれる産屋が長く利用されてきたことなどの社会背景を踏まえつつ、日本最小の自治体である青ヶ島という 1 つの地域に限定することによって、医療化以前の出産を支えたと考えられる出産介助者の役割の実態を、共同体の歴史や社会背景など地域の文脈で捉えることが可能であることを提示した。

「第一章 先行研究と本研究の課題」では、序章で述べた問題意識とその背景を考えるにあたり、本研究が分析の軸を置く日本民俗学を中心に、隣接分野（人類学、歴史学、社会学）における出産および出産介助者をめぐる先行研究の流れを整理した。さらに、青ヶ島における医療化以前の出産習俗に関する先行研究を概観したうえで、出産介助者の役割がどのような視点を持って研究されてきたのを明らかにし、本研究の課題を確認した。

出産が研究テーマとして着目されるようになったのは、病院出産における過剰な医療介入問題が表面化した 1970 年代以降であり、それ以前の出産研究のほとんどが医学的な視点に依ったものや通過儀礼研究に位置づけられるもので、医療化以前の出産の実態や人々の実践のありようは着目されず、学術的に観察・記録されてこなかった。出産介助者の役割についても、明治 7（1874）年に制定された医制によって業務範囲が産科医と明確に区別

されるまでは多様な役割と意味づけがなされていたが、医制制定後は、西洋近代医学の枠内で規定された出産介助者の役割を検討するという視点を中心であったことを明らかにした。

一方、先行研究に記された青ヶ島の出産では、出産介助者が産婦と児に触れず、女性たちがたしかに「ひとりで子供を産み」、介助者は、出産中（場合によっては産後）に呼ばれていたことを確認した。つまり、青ヶ島の女性たちが、身体的には出産の場に医療的な技術を有する出産介助者を必要としていなかったにも関わらず、出産あるいは産後の場において介助者が何らかの役割を担っていたことがうかがわれ、そのような出産のあり方が、産婦人科医が常駐し近代医療が導入された昭和 37（1962）年以降も続けられていたことを確認した。

また、先行研究では、介助者のみならず、青ヶ島の女性たちがタビゴヤでの出産習俗を否定的に捉えているかのような記述が特徴的であり、記述者によって介助者の役割の範囲についての認識も異なっている。加えて、国内においても産屋の利用は肯定的な意見が多く散見されてきたなかで、青ヶ島のタビゴヤの評価が否定的見解に集約されていることにも疑問を呈し、その特異性を議論する際に、タビゴヤの歴史と時代背景、共同体の動向などを踏まえたうえで、タビゴヤが実際にどのように使用されていたのかを明らかにすることこそ必要ではないか、という見解を提示した。

さらに、従来のお産介助者の役割に関する先行研究において、有史以前の時代から出産には介助者の存在が必要とされていたことを前提に議論が展開されてきたことを指摘し、出産介助者が産婦や児に触れることを前提とする出産介助のあり方が、あたかも「本来の出産」「正常産」であるような認識を再考する必要があるのではないか、という疑問を提示した。

これを踏まえて、①医療化以前の青ヶ島において、産婦がひとりで子供を産むことを可能にしていた社会背景の検討、②先行研究において、青ヶ島の出産習俗やタビゴヤに対する否定的見解が登場した背景についての検討、③青ヶ島の事例の検討を通じて、従来の先行研究における出産介助者の役割に関する定説の再考を図り、出産介助者の役割を新たに検討する、という 3 つの課題を設定し、二章以降で検討を行うことを明示した。

「第二章 調査地概要」では、「ひとりで子供を産む」ことが長く保たれてきた本研究の調査地である東京都青ヶ島村の概要を示した。

「第三章 青ヶ島における医療化以前の出産および出産介助体験の実態」では、離島という地理要因から医療に容易にアクセスできない環境にあつて、結果的に医療化以前の出産環境が長く残された東京都青ヶ島村で、昭和 8 年から昭和 53 年の間に、島内で出産した経験を持つ 60～90 代の女性 13 名と、出産経験はないが出産介助の経験を持つ 80～90 代女性 2 名、合計 15 名の女性に対して実施した聞き書き調査の結果を提示した。なお、青ヶ島の歴史と社会背景を踏まえると、出産という生物学的な行為のみに着目するだけでは、出産介助者の本来の働きを確認することはできないと考える。よって、妊娠期、あるいは、

それ以前からの出産介助者と産む女性との関わりを見ていく必要があると思われるため、成女（初潮）儀礼の実態から追うことにした。

調査の結果、次のことが明らかとなった。

1点目は、青ヶ島の女性たちは「産婦が出産に集中するための環境整備」を出産介助者の役割と認識し、介助者に任じられた者がこれを実践していたことである。出産介助者は「産婦が出産に集中するため」に必要な存在であり、産婦の不安や欲していることを察知し、言葉を介さず対応し、出産の進行を阻害する要因を排除するなどの後方支援を行うことで、結果として、産婦に強い自信と気概を備えさせ、自分を信じて、全てを受け入れてくれる介助者の存在を身近に感じながら安心して出産に臨むことで、介助者が産婦と児に触れない出産を可能にしていたと考える。なお、このような出産が可能となったのは、産婦を出産に集中させることを目的に、産婦の幼少期から長い年月をかけて築き上げた互いの信頼関係と、産婦が滞りなく出産を終えるための身体技法や知識・知恵の教示など、出産介助者によって綿密に施された産婦に対する配慮によってもたらされた結果であり、最終的には、産婦自身が「ひとりで子供を産んだと思える」ことこそ、「見えない仕事」と称される出産介助者の本質的な役割であると考えられる。

2点目は、出産介助者が、仮親として産婦の誕生時からの一連の成長に寄り添って継続的な関わりを持つことが、「産婦と児に触れない」出産介助の在り方を可能にしたということである。出産介助者は、産婦が出産を迎えるまでの間に出産に関する知識や知恵を折に触れて教示し、妊娠期には徹底して心身の調整を促すという役割を担っていた。しかし、いざ出産を迎えると、コウマテオヤからの働きかけや助言を控え、産婦に産む覚悟を持たせつつ、産婦の意に沿う後方支援を行うのである。

出産介助者は環境整備だけでなく、出産の進行状況を見極めることも重要な役割であったが、その際、出産介助者に求められる最も重要なのは観察力、すなわち「相手の思いや動きが自分の事のようにわかるようになる」ことであったことを明らかにした。ひとりの女性の一連の成長に寄り添った継続的な関係性が介助者自身の人間的成長をもたらすと同時に、産む女性は自らの力を信じて出産に臨み、出産に集中することで産む力が引き出され、結果として、介助者が「産婦と児に触れない」出産介助の在り方を可能にしたと考える。実際に出産介助者が産婦と児の身体に直接接触することはいっさいなく、介助者が産婦や児にみだりに触れないことで、産褥熱などの感染を予防になっていた可能性にも言及した。

「終章 考察」では、各章の議論を総括し、一章で示した本論文の課題を踏まえ、本研究で得られた知見を提示した。出産介助者が「産婦と児に触れない」出産介助のあり方が可能となった背景として、タビゴヤが出産の一時の場ではなく出産に至るまでの教育の場であったこと、出産介助者が産婦の出産への集中を促す存在であったこと、産婦の初潮を機に結ばれる擬制的親子関係を軸にした1対1の継続的な関係性に基づくエモーショナルサポートが効果を発揮していたことを指摘した。

このような出産のあり方を可能にしていた要因として、タビゴヤで受け継がれてきた知識・経験と産婦と出産介助者の継続的かつ社会的な関係性が重要ではあるが、産婦と出産介助者の関係性において、出産および出産介助という経験は単なる一点であって、継続的な関係性が出産介助者の本質的な役割として重要であることが示された。そして、こういった関係が役割の内容を変えて生涯（場合によっては死後も）続いていくものであるところに青ヶ島の事例の特徴が見いだせると結論付けた。